

書 評 Book Review

外 村 晶 編

染色体異常——ヒトの細胞遺伝学

朝倉書店, 369 頁, 5,000円, 1978 年

急速に発展した細胞遺伝学は、1970年代の分染法の出現によって、現象論的研究から染色体異常の成因解明への方向へと、大きく進路を変えつつある。また、これら技術および知識の臨床医学への導入は、臨床細胞遺伝学として、これらの進展に大きな触媒の役割を果たしたことも事実である。換言すれば、単に生物学的領域のみに止まらず、臨床医学領域での応用が、その進展に拍車をかけたと言っても過言ではない。

染色体異常ないしは細胞遺伝学に関しての、いくつかの和書がすでに出版されているが、内容的に基礎と臨床の均衡が保たれたものを、私は未だかつて手に入れることができなかった。しかし、本書はその内容がきわめて豊富で、広い範囲についての新しい知見が記載され、執筆者はわが国における当該分野での第一人者であることなどから、私を満足させるには十分であった。強いて言えば、染色体異常症の記載に、豊富な写真を用いると同時に、臨床所見の記述にいま一つの工夫がこらされていれば、他の項目との釣合いが保たれたようにも思える。それほどまでに、基礎的・非臨床的内容に重点が置かれているのも、本書の特徴の一つである。これらの事項が全体の7割を占めること、および執筆者の多くが非医師であることなどからも、そのことはうなずける。

本書の他の特徴としては、統一された和訳専門用語の使用にある。例えば、isochromosome に同腕染色体という語を当てているのも、等(腕)またはイソ染色体という語を用いるよりは、よりその現象を理解するうえに適切な表記と考えられたからであろう。いずれにしても、混乱している用語を何らかの形で統一する方向へ持って行こうとする試みは必要である。その意味でも本書(第2章)の訳語(用語)を一つの基準とすることをすすめる。本書にも見られる、例えば Turner's syndrome というように、's を付しての英訳は好ましくない。また、ダウン症候群とダウン症など、2つの疾患名の使用も、前者に統一したい。

本書の対象は、医学、遺伝学、生物学の研究者、さらには一般学生および臨床検査技師であるとしているが、その内容からしても満足できるものであろう。しかし、一般臨床医には、やや専門的・基礎的内容の方がより濃いために、違和感が無いとも言えない。また、本書の目的ではないにしても、ダウン症候群の項には認められるものの、遺伝相談に関してはほとんど触れていないのも、われわれ臨床医には淋しい。

価格、体裁ともに申し分なく、図版・写真も鮮明である。欲を言えば、G-band および Q-band の正常核型(男・女)の鮮明なものを、1頁をさいて挿入しておけば、初心者には大いに役立つ。また、よく校正され、誤植はきわめて少なく、coactation, Welcome などいくつかの横文字にみられる程度のものである。

いずれにしても、本書は細胞遺伝学または染色体領域の研究または教育に関与する者にとっても、座右に備えたい一冊である。

(山口大学小児科 柳沢 慧)